
オトメの事情

維 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オトメの事情

【Nコード】

N4730P

【作者名】

維 黎

【あらすじ】

あたしには誰にも知られちゃいけない秘密がある。で、それが原因で身だしなみのチェックができないの。これって女の子にとってはかなり危機的なことなのよね。どうしたものかしらん、と日々思いつつのある下校途中、ちょっとしたトラブル発生で思いもよらない解決策が！？

『鏡』をお題にした短編ストーリーです。

バスタオル一枚を巻いただけの格好でベッドに腰を下ろしていたわたしは、ふと思い立って鏡の前まで歩いていく。

ゆらゆらと漂うような鏡面に映し出されたその姿は、ハッキリとした実像を映し出している訳ではないのだけれど、それでもなかなかの、いやいや。ものすごいナイスボディな肢体であることが判る。しかも、たった今お風呂から上がったばかりだから、肌は薄っすらとピンクに染まっていたりして、超色っペーって感じですか？

高校二年生でこれだけのナイスボディはそうはいないでしょ。

バスタオルを支える胸はくつきりと谷間を作っているし、腰なんかはキュっとくびれてて。そんでもってお尻には張りがあってツンと上を向いている。いわゆる、ボン！ キュ、ボン！！ っていうやつよね。自分で言うのも何だけれど、はつきり言ってお水系のおねーさま方とも堂々と勝負できる自信はある。……だからって、将来その道に進むつもりはないんだけど。

なんとなくテンションの上がったわたしは、自慢の胸を抱えるように腕を組んで前屈みになってみる。問答無用の悩殺ポーズ。

「おお！！」

思わず感嘆の声をあげるわたし。

フフン。そんじょそこのグラビアアイドルも顔負けよね。写真集なんか出しちゃったりしたら飛ぶように売れるわよ、きつと。でもまあ、わたしってば写真には写らないんだけどさ。あと鏡もそう。今部屋にあるのはわたしが魔力で作った鏡。って言っても普通の鏡じゃない。これは水にちよつとした魔法をかけて空間に固定させてるの。ただ、凍らせて固体化させてる訳じゃなくて、表面は水のまんまだからゆらゆらと波打っちゃうのよね。ほら、テレビなんかで見たことない？ スペースシャトルとかの宇宙船で、水がぼわわわんって浮かんでるやつ。あんな感じかな。わたしは水面鏡って呼ん

でるけど。ほんとは、凍らせて氷にしちゃえばもつとはつきりと映るんだけど、氷にしちゃうと溶けないようにしないといけないから、ちよつとめんどくさいんだよね。で、何でこんなことしなきゃいけないかって言うと、さっきも言ったように、わたしは鏡に映らないのよ。厳密に言うくと人工物の鏡ってことなんだけど。自然界にある物　例えば、水溜りとかだったら映るのよ。だから自分を映し出そうとすると、鏡の代用品みたいなのを作らないといけないわけ。

さらに、何故鏡に映らないかって言うと……何でだろ？

いや、別にふざけてる訳じゃないのよ。ホントにわたしにも判らないんだってば。考えられるとしたら、わたしが吸血鬼だからってことになると思うんだけど、吸血鬼が鏡に映らない科学的根拠なんて、わたし知らないもん。

あーあ。そのうち「じゃぱねつとタカタ」とかで、吸血鬼用の鏡とか売り出さなかなあ。って、そんな無茶なこと考えても仕方がないか。もう、寝よつと。

ギラギラとした焼け付くような容赦のない日差しが降り注ぐ季節
夏。

教室の中は、乾ききつた熱い空気が満たしているために、やる気、根気といった諸々の気力を根こそぎ持っていかれた気分になる。時折、かすかな風が教室を吹き抜けるその一瞬がせめてもの救い。まあ、平たく言えば「クソ暑いけど平和なひと時」って感じ。

窓からの景色は、雲一つない青空のせいか妙に白っぽく感じられる。真夏日の太陽がスポ根アニメの主人公の瞳のように、やたらとメラメラ燃え盛っているからなんでしょうね、きつと。

ああ、ヤダヤダ。夏の紫外線は女の子の大敵だっていうのに。それでなくても、吸血鬼であるわたしは普通の人間より日の光に弱い

のにさ。あ、わたしが吸血鬼ってことは誰も知らないことだから内緒にしておいてよね。ま、吸血鬼っていつても、見た目は普通の人間の女の子とそう変わらないんだけどね。外人張りのスタイルはしてるけどさ。

身長はクラスの子の中では後ろから二番目で（わたしの後ろはバレエ部の娘で、なんと百八十二センチもあるのだ！ この娘がクラスで飛びぬけてデカイの）顔はどちらかというと面長。鼻筋はけっこうスツツとしてて、目元のラインは心持上がってる感じ。髪は栗色で、前髪からピヨンと飛び出た二本のクセっ毛がポイントかな。触覚みたい、って言われたこともあるけど、わたしは気に入ってた。

本当にどこにでもいる女子高生だと思うんだけど、実は霊長類ヒト科の生き物じゃなかったりするのよねえ、何故か。

ちなみに、映画や小説で出てくる吸血鬼とは違って昼間は棺おけの中で寝て、夜に活動するってことはないんだ。日の光に当たると肌が焼けただれとか、灰になるなんてこともないの。多少、貧血気味だからずっとお日さんの下でいると、クラツときちゃうけど、そんなことって人間の女の子でも別に珍しいことではないでしょ？ ニンニクとか十字架もまったく平気。あんなの怖がるのはお話の中だけ。だいたい、ニンニクや十字架の何が怖いって言うのよ。ガーリックトーストなんて、すっごい美味しいじゃない。ねえ？

「……ら……」

あと吸血鬼っていったら「血を吸う」ってことが一番にイメージがあると思うけど、それもしない。遙か昔のご先祖さまは人間の血を吸ってたらしいけど、現代吸血鬼はそんなことしないのだ。っていうか、そんなことしてバレたりしたらシャレにならないし。生理的に（？）血が欲しくなる衝動が幼年期のときにあるけど、別に人間の血じゃなくてもいいし。要は動物の「血」ならなんでもいいんだ。

「……………み……………ら……！」

そもそもわたしたち「吸血鬼」って何なの？　って疑問も沸かなくはないんだけど、ぶっちゃけて言うところ「何だっかっていいじゃん」って感じ。だいたい……

「華美羅^{かみら}！！」

「……って、さっきからうるさいぞ！　クラスメイトその一！　今大事なことなんだから！！」

話の腰を折られたわたしは、突然横から割って入って来た男子生徒を一喝する。

「うるさいって、おまえな……。さっきから人が呼んでるのに無視しまくってる奴の言うセリフかよ、それが。しかも何だよ。その『クラスメイトその一』ってのは？」

「何って、あんたは今までの解説的な話の流れを変える為に出てきた脇役に過ぎないんだから『クラスメイトその一』で充分なのよ！」

「何を訳のわからんことを……。それよりおまえ、また自分の世界に入ってたな？　……ったく。気味わりいからやめとけって言ってるだろ、それ」

いくぶん眉根にシワを寄せて、さも「気持ち悪いです」ってな顔のクラスメイトその一。

「フン！　でつかいお世話よ。あんたみたいなガサツな生き物には、複雑な乙女心は理解できないわよ」

一人称の語りっていうのは、それなりにいろいろとめんどくさいことがあるのにさ。こっちの都合も知らないでのんきなものよね。まあ、こんな名前も設定されていないようなやつに文句を言っても仕方ないんだけど。

そんなわたしの心情を知ってか知らずか（絶対に知らないでしょうけど）クラスメイトその一は話かけてくる。

「な〜にが乙女心だ。んなことしてつから、高二にもなって彼氏の一人もいなくて『不嫁後家^{いかすこけ}』とか言われんだよ」

「誰が『不嫁後家^{いかすこけ}』よ！　だいたい、それ言いふらしてるのあんたでしょうが、狛彦！！」

って、しまったあ！ 名前出しちゃったよ。くくう、不覚！
！ …… チツ！ こうなったらしょうがない。ちょこつと説明するか。

え〜と。こいつの名前は、犬神^{いぬがみじん}狛彦^{くまひこ}名前からして、動物占いをしたら絶対に犬間違いなしなやつ。中身もそのまんま犬っぽくて、妙に人懐っこい。一年のときも同じクラスで、たまたま席が隣同士だったこともあって、入学して一番最初にちゃんと話したのがこいつだったの。まさしく「クラスメイトその一」だったんだけど腐れ縁と言うか、何と言うか、妙にイヌが……じゃない。ウマが合うやつなのよね。こいつの一番の特徴っていったら、やっぱり髪の色になるかな。プラチナブロンドって言うの？ 信じられないでしょうけど銀色してるのよ、こいつの髪。これがまた地毛だったりするものだから、そんなのアリ！？ って感じ。大抵の人は「ホントにあんたは日本人か！」ってツツコミ入れると思う。

気が付けば何故か一緒にいることが多いんだけど、残念ながら別に彼氏彼女の関係ではない。……ん？ 待て待て。残念ながらっていうのは誤解を招くわね。わたしはちつとも残念じゃないんだからここ、訂正ね。

「……おい、かみ……」

「アゝ！？」

「……」

再び割り込もうとした狛彦を一睨みして黙らせる。邪魔しないで欲しいわ、まったく。つと。どこまで話したっけ？ そうそう。狛彦とのことだ。あえてこいつとの関係を言うなら「ちょっと相手をしたら懐かれた犬」みたいな。とりあえず、期待されるような間柄じゃないことだけは確かね。うん。

チラリ、と狛彦を見てみると、さっきの睨みが効いたのか黙ったまま、まるでお預けを食った犬みたいにわたしを見ている。何だかその様子が可笑しくて、このままずっとお預けにしところかと思っただけど、さすがにちよつとそれは可哀相か。

「で、なんか用なの？」

「……ああ。とりあえず二つほどあるんだけどよ」

む。ちよつとした手違いで名前を出したとはいえ、脇役キャラには違いないのに二つも用件があるとは生意気な。でも、わたしは寛容だから許してやろう。

「まあ、それほどたいしたことじゃねーんだけどよ。今日、転校生が来るらしいぜ」

「へえ、今ごろ？」

わたしは素直に驚く。

特別すごい事件つて訳でもないけど、めずらしいことには違いない。小・中学校ならいざ知らず、高校で転校生つてのはそうあるものじゃない。しかも、もうすぐ夏休みつていうこの時期に。

「詳しいことはわかんねーけど、なんかウチのクラスらしい」

「ふーん。で、あんた何でそんなこと知ってんの？　もしかして、偶然職員室の前を通りかかったとかのパターン？」

「……先に言うなよ」

うつわ。えらくお約束な……。

「そんで？　その転校生つてどんな子？　男？　女？」

「いや、そこまではわかんねーけど……」

使えないやつね。ま、いつか。どっちみちすぐ判ることだし、わたしにはそれほど関係ないだろうし。　と、このときは思ったんだけどねえ。

「んで、もう一つの用は？」

「いや、そろそろ朝のホームルーム始まるから、そこどいてくんない？　俺の席だし」

「ヤダ」

即答。

「ヤダって……」

「ここ、風通しいいもん。わたしの席と代わってよ」

「……無茶言うなよ」

フン。心の狭いやつね。

キーン！ コーン、カーン！ コーン！！

心の中でそう毒づくと同時に予鈴が鳴った。そして、担任の教師と生徒らしき見慣れない女の子が教室に入ってきた。

「華美羅さん」

後ろから名前を呼ぶ声がした。特に驚くこともなく振り返る。

この一週間、妙に視線を感じていた。そんなとき周りを見渡してみれば転校生の女の子。転校初日から、チラチラと観察するようにわたしを見ていたような気はするけど、今は、はっきりとわたしを睨み付けている。何だか射るような痛い視線。

つつがなく授業も終わった下校途中。最寄の駅へと向かう大通りは使わずに、車の交通量がほとんどない、裏路地のような通学路を歩いていたわたしの後方から転校生が声をかけてきたのだ。

「華美羅さん……よね？」

彼女は確認するようにもう一度わたしの名前を口にする。彼女の瞳には何やら強い光が見てとれた。

（恋の告白……って感じじゃなさそーね）

わたしのような美少女が主人公なら、女同士の恋の物語って線もあり得るけど、どうやら今回は違うみたい。

そう思ったわたしの横手から同じようなセリフが聞こえた。

「えらく思いつめたような顔してるけど、恋の告白って訳じゃなさそーだな」

「そうね　って！　狛彦！！　あんた、いたの！？」

転校生の存在よりも、狛彦がいたことに驚いた。いつの間に、いつからいたんだ？　こいつは……。

「何だよ、いちゃ悪いのか？」

「悪い！」

「……………」

一言で狛彦を斬り捨てて、再び転校生に視線を向ける。

「仲が いい のね」

ニッコリと言うよりも、ニヤリと言った方が近い笑みを浮かべる彼女。何だかバカにされたような気になる。

「あなたにどう見えようと、こいつとはただのクラスメイトよ。そんなことより何か用があるんじゃないの？ 転校初日からわたしが気になるようだけど？ ページの都合もあるから手短にお願いしたいんだけど」

「………… ページって何のこと？」

転校生はキョトン、とした顔で首を傾げる。

「ああ、こつちの話だよ」

「あんたが答えるな！」

彼女の疑問に答える狛彦。人のセリフを取らないで欲しいわ。

「それで？ 何？」

「………… こほん…………。華美羅さん！ あなた人間じゃないわね！！」

彼女は気を取り直して、ビシィ！！ とわたしを指差し何だか得意げな表情を見せる。にしても、いきなりトップギアにテンションもってきたわね。何かわる…………

「何か悪いもんでも食ったんじゃない……………」

「あんたは黙ってなさい！！ …… わたしが人間じゃないってどういうこと？」

「ふふん。知りたいなら教えてあげる。わたしの父様は退魔師なの。わたしもその血を受け継いでいるわ。だからわたしには判るの！」

自慢が入っているのか、彼女は幾分、胸を反らせる。

退魔師ねえ。転校生がいきなりそんなことを口にすると、何だかパターンのな感否めないんだけど、そういう人種（？）がいることはパパとママから聞いたことはあった。会ったのは初めてだけど。

「退魔師ってアレでしょ？ 俗に言う『覗き屋』ってやつ？」

「のぞ…………。も、もしかして、あなたが言いたいのには『拝み屋』の

ことかしら？」

「ああ、それぞれ」

ポン　と手を打つわたし。

「あなたね……。どこをどう間違えるのよ！　『のぞき』と『おがみ』って一文字も合っていないじゃない！！」

彼女はえらくご立腹の様子で怒鳴り返してきた。　　単なる冗談なのに。

「……ま、まあいいわ。そんなことより、今からあなたの正体を暴いてあげる。この……『封魔鏡』でね！！」

彼女はそう言つと、どこからともなく古めかしい鏡を取り出して掲げてみせる。ちょうどお日さまの光がバックライトのような効果をもたらして、まるで某アニメに出てくるネコ型ロボットがアイテムを取り出した感じ。「ピコピコーン」っていう効果音はないけど。

なんだかなあ、と思いつつ何気にその鏡を見たたん、わたしは息を呑んだ。

「！？」

声にならない悲鳴をあげる。

その鏡はちょうど下敷ほどの大きさで、周りを何やらきめ細かく彫られた木枠のようなものにはめ込まれている。骨董品とか芸術的な価値があるかどうかはわからないけど、部屋に飾るアンティークとしてはそれなりにいいかもしれない。だけどわたしが驚いたのはそんな外観的なデザインじゃなかった。

彼女が手にしたその鏡にわたしが映っていたのだから。それが意味するところは……。　「うふふ。驚いているようね。そう。この鏡は人外のモノを映し出すの。普通の人間は決してこの鏡には映らない」

「……」

彼女の言葉が遠くから聴こえてくる感じがする。その内容は頭に入ってこない。目の前に突きつけられた現実がわたしの思考を停止

させ、得体の知れない感情が心を縛りつける。微かに身体が震えているのを自覚する。

「……そして、この鏡はただ人外のモノを映し出すだけじゃない！映し出した相手を吸引して封じ込めてしまうのよ！ わたしが一言、術を唱えれ……」

「欲しい……！！」

彼女のセリフを最後まで言わずに、思わず絶叫する。

「は？」

調子良く語っていた彼女は、一瞬固まったように見えたけどそんなことはどうでもいい。なんてったって、鏡に映らないわたしをあの封魔鏡とやらは映し出しているのだから。それが意味するところはつまり、あの鏡さえあればいちいち鏡もどきを作らなくてもいいんだ。どこでもお気軽に身だしなみのチェックができる！！ わたしだって人並みに（人間じゃないけど）そういうことは気にするのだ。

「ねね。ねえ！！ その鏡、わたしにちょうだい！！」

顎先で手を組んで瞳をキラキラさせてぶりっ子（死語？）風をお願いポーズを試みたり。

「な、なによ、急に……。気持ち悪いわね」

何気に失礼な発言ではあったけど、今のわたしには気にならない。

「そんなのどうだっていいじゃない！ ねえ、ちょうだい？」

「ふっ、バカなことを……。この『封魔鏡』が欲しいですって？」

これをあなたにあげる訳ないでしょ。この鏡に今からあなたを封じるっていうのに！！」

彼女はわたしの頼みを一蹴して封魔鏡をこちらに向けた。ま、当然の反応よね。しょうがないか。

拒否されてもわたしはそれほど落胆しなかった。ただゆっくりと瞳を閉じる。

「さあ！ 封魔鏡よ！ 我が眼前に在りし魔性のモノを汝が内に封じた……」

彼女が術を唱え終わる直前、閉じていた瞳を、カツ！　っと見開き、彼女の瞳を捕らえる。

「……………」

その瞬間、術の詠唱が止まった。そしてゆっくりと、もう一度彼女に言い聞かせるように同じ言葉を告げる。

「……ねえ。その鏡をわたしにちょうだい？」

「……はい」

今度は拒否されなかった。一切の感情を無くした、まるで人形のような表情で彼女は封魔鏡を手渡してくれた。

「ありがと……………」

感謝の言葉にも反応は返ってこない。そのことに特に腹を立てることもなく手渡された鏡を覗き込んだ。

そこにはわたしが映し出されていた。瞳孔が縦に開き、瞳を朱に染めたわたしの顔が…………。

心を縛る魅了の魔力。わたしたち吸血鬼にはそれがある。

「……ふふ…………。うふふ……………」

我知らず歓喜の声が洩れてしまう。

「すごい、すごい！　すごーい！！　ホントにわたしを映してくれてるよー、この鏡！！　やった〜」

魂の絶叫。

いや〜。いい物を手に入ってしまった。むふふ

「ありがとね　あ……………」

わたしは人形と化した転校生にお礼を言おうとして、彼女の名前を覚えていないことに気付いた。転校初日に自己紹介してくれたとは思っただけ…………。

ま、いつか

「あー、こほん。あなたはもう帰っていいわよ。…………そうね。一度学校に戻って校庭を三週走って『ワン』と吼えてから、うちに帰きなさい」

「…………はい」

彼女は従順に返事を返すと、くるりと反転すると学校への道を引き返していった。

「どうでもいいけど、何でわざわざ校庭三週？」
ずっと沈黙してた狛彦がポツリと呟く。

「……………」

「……あ。こいつのこと忘れてた……。もしかしてバレた！？わたし人間じゃないってことが！」

「……狛彦、あんた……………」

「ん？」

いつもと変わらないのほんとした表情。別段、驚いた様子もわたしを怖がっている様子も見せない。

「……今までのことずっと見てた？」

「見てたも何も……。目の前で話してたくせに」

「……………」

仕方が無い。いくら人懐っこい人畜無害な狛彦でも、わたしの正体を知られる訳にはいかないもんね。

「狛彦。わたしの目を見て」

「ん？ 何だ？」

狛彦は素直にわたしの瞳を覗き込む。

「……狛彦。あんたは何も見なかった。何も聞かなかった。今日は学校が終わって一人でまっすぐうちに帰った……。いいわね？」

狛彦に魅了の魔力を使って記憶を操作する。

「よくねえよ」

「へ？」

思わず気の抜けた空気が洩れる。……って。え！？ どういうこと？ 術のかけりが浅かったのかな？？

「……こほん。……狛彦。あなたは今日は一人で家に帰った。わたしも転校生とも会わなかった。いいわね？」

さきほどよりも口調にも視線にも力を入れた。……んだけど……。だからよくねえって。さっきから何言ってるんだよ、おまえ」

うそー！ー！ー！ 術が効かない！？ 何で！？

「んなことより、そんな古臭い鏡なんか貰ってどうすんだ？」

狛彦はわたしの驚きをよそに封魔鏡を覗き込む。

「お 相変わらずいい男だな、俺って。……ちょっと前髪がうるさいかな」

お気楽口調で鏡を見ながら、前髪を整える狛彦。

って、待って！！

「何であんたがこの鏡に映ってんのよ！！」

「どわっ！ いきなり耳元で叫ぶなよ」

「何で、何で、なんでなのよー！！」

狛彦の批難も聞こえず、わたしは狛彦の襟元を掴んで前後にブンブンと揺さぶった。

「ちよ、まっ……。待て……。……は、話……。でき……。な……」

しばらくの間揺さぶり続けていたわたしは、ようやく落ち着いて狛彦の襟元から手を離れた。相変わらず、頭の中は混乱中だったけど……。

「……げほっ、げほっ！ たたく。すげえ力だな。……ふう。えつと。何で俺がその鏡に映るかだったよな」

コクコクと首を振るわたし。

「その鏡は人じゃないモノを映すんだろ？ だったら俺が映ってもおかしかねーよ。俺、狼男だもん」

「……うそおー！！」

本日何度目かの魂の絶叫が辺りに木霊した。

吸血鬼と狼男。どうりでウマが合うはずよね。

バスタオル一枚を巻いただけの格好でベッドに腰を下ろしていたわたしは、ふと思い立って鏡の前まで歩いていく。鏡に映し出されたその肢体は相も変わらずナイスバディ。

ふむ。今度は写真を撮りたいなあ。

あーあ。そのうち「じゃぱねっとタカタ」とかで、吸血鬼用の力メラとか売り出さないかなあ。って、そんな無茶なこと考えても仕方がないか。もう、寝よつと。

そう言えば狛彦が、一学期から新しい教師が来るって言ってたっけ……。

了

（後書き）

数日前に、流れ流れてこのサイトにたどり着きました。ふと思い返して、昔に書いてた小説がまだパソに残ってたのを見つけて、投稿してみました。

数年前に書いたもので、鏡をお題にした作品です。当時のサイトには未投稿だったものです。拙い作品ですがご容赦のほどを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4730p/>

オトメの事情

2010年12月19日06時10分発行